

書誌
年鑑

2023

有木太一
編

目次

凡例	vi
この本の使い方	viii
書誌目録	1
あ	3
か	68
さ	175
た	289
な	358
は	386
ま	443
や	470
ら	484
わ	502
書誌解説	505

凡 例

I 収録範囲

1 期間

日本で発表された各種の文献目録すなわち書誌のうち、2022年1月から12月までに発表されたもの、およびそれ以前の発表で『書誌年鑑』に掲載できなかったもの、合計9,536点(キーワード件数)と書誌解説15点を収録した。

2 内容

書誌は文献のリストなので、博物館などが編集・発行する動植物・鉱物の目録はもちろん対象外であるが、書誌の一分野である文書目録も対象外としている。近年地方・中央で多くの文書館が開設され、中世・近世・近現代の文書が多数発掘・保存される情勢となったので、本書では、文書目録の収集や目録化は、新しく大きく形成されてきた文書館界に任せるのが妥当だと考えている。本書収録の書誌は、文献探索上で書誌が必要とされる、人文科学・社会科学・生活科学の範囲のものにおおむね限られている。

3 採録

本書の編者が新刊の図書資料・雑誌から日常採録した書誌に、日外アソシエーツにおいて収集したデータから編者が選択・現物確認した書誌を加えている。

II 配列方法

1 「書誌目録」では、上記の書誌記述から件名・人名・地名・誌名などのキーワードを選定し、その五十音順に配列している。

2 「書誌解説」では、本書収録の書誌から、主題・形式などに特色のあるものを選択した。配列は解説者名の五十音順とし、同一解説者内ではキーワードの五十音順とした。

3 キーワード五十音順の配列においては、濁音・半濁音は清音とし、ヴーウ、ヂ→シ、ヅ→スとした。促音・拗音も直音とし、長音符(音引き)はアの前とした。

III 記述形式

1 キーワード

第1キーワードはゴシック体で表示。第2キーワードは「⇔」の後に続けて明朝体で表示し、同一記述を第2キーワードの位置にも副出した。

2 図書単行書誌

【書名 副書名 卷次】	発行所名	☆
(著編者名)	発行年月	総頁数 判型

* 図書単行書誌では、書誌表示を☆印とした。

* 発行所名欄は下記のように省略した(以下3、4でも同様)。

○○大学 → ○○大 ○○短期大学 → ○○短大

○○教育委員会 → ○○教委

3 図書収録書誌

【書名 副書名】(著編者名)	発行所名	書誌表示
〈収録書誌編者名〉	発行年月	始-終頁

4 雑誌掲載書誌

「誌名 巻・号=通号」	発行所名	書誌表示
〈掲載書誌編者名〉	発行年月	始-終頁

* 雑誌全体の編者名(団体・個人)は省略した。

5 書誌表示

参考文献・引用文献・著書目録・著作目録・文献目録・業績・年譜など。長いものは短縮した。

6 頁記述

p: page f: front b: back r: random

pf: 前付部分に書誌があって、頁付がない場合。

pb: 後付部分に書誌があって、頁付がない場合。

pr: 前付・後付以外の部分に書誌があって、頁付がない場合。

p1-3f: 前付部分に書誌があって、頁付がある場合。

p1-3b: 後付部分に書誌があって、頁付がある場合。

pr: 各章節末に書誌がある場合。

* 連載ものは初回の掲載頁のみを記載した。

この本の使い方

1. アベリティブ

すでにご存じとは思いますが、書誌とは何であるかをまず確認しておこう。ざっくり言えば、書誌とは「本の選手名鑑」である。

野球やサッカーなどのプロスポーツ、あるいはAKBや坂道などアイドルグループには、「選手名鑑」「メンバー名鑑」といった本（ないし冊子）がある。運営会社など興行側でつくる公式本、一般の出版社や個人がつくる非公式本の別を問わず、スポーツなら各チームの選手について、アイドルならそのグループのタレントについて、プロフィールが紹介されている。単独で1冊にまとめられるほか、雑誌の特集記事や付録になったり、一部公営ギャンブルでは無料配布されることもある。

書誌はこれらと似ている。選手名鑑には、あるチームが試合で勝利することを目標として集められた選手の、氏名・出身地・生年月日・背番号・ポジション・身長・体重といった情報が出ている。これと同じように、書誌には、あるテーマを究明することを目標として集められた本の、書名・著者名・刊行年月・出版者（社）といった項目が掲載されている。チーム＝テーマに則って、選手＝本が紹介されている。書誌によって、あるテーマを明らかにするための本を知ることができる。

当『書誌年鑑』は、「書誌」というテーマに基づいて、書誌＝本の選手名鑑を集めた本。このことから“書誌の書誌”と呼ばれている。これにより、どんな「本の選手名鑑」が出ているかがわかり、あるテーマについて知りたい／調べたいと思った時に、どの本を読んだらよいかの指針となるのである。こうした用途を補うものとして、図書館にはOPAC（オンライン蔵書目録）が普及しているが、OPACではその館で所蔵しているものしか検索できないし、また隣接領域の文献がたまたま目に入るといっても生じないので、プラスアルファの効果は生まれにくい。

大学に入学すると、学術論文やレポートの作成についてオリエンター

ションを受けると思う。そこでよく言われているのが、学術論文の脚注から芋づる式に参考文献を探し求めるというやり方である。ところが、この方法はかなりの労力を要する。脚注には参考文献以外の内容も含まれており、文献の書誌情報だけをまとめようとしても余計なノイズが多いからだ。そもそも「論文」にどのように行き当たればよいのか。

そういう時に、まず『書誌年鑑』を手にしていただきたい。書誌＝文献一覧がテーマ別に多数並んでいる。読者は文献を探索する際にまず本書を使うことで、芋づるをたぐり寄せるエネルギーが軽減できるのである。

というわけで、当『書誌年鑑』は、単に物事を知る・調べることから一歩進んで、よりクリエイティブに、イノベティブな論文やレポートを生産するための本であると言える。

2. プラ

『木綿のハンカチーフ』（太田裕美）や『ルビーの指環』（寺尾聰）など、数々のヒット曲で昭和・平成の時代を風靡した、作詞家の松本隆氏について調べてみよう。

本書の昨年版『書誌年鑑 2022』で、見出し語「松本隆」を探してみると、431頁に1件が掲載されている。それを見ると、KADOKAWAから2021年10月に刊行された『風街とテラシネー作詞家・松本隆の50年』という本（田家秀樹著）の、518-519頁に「参考文献」という形で書誌が載っているとわかる。さらに、関連ありそうな「流行歌」も本書で引いてみると、468頁に5件見つかった。「作詞」「作詞家」などは見つからなかった。

今ここで出てきた合計6冊の本を読むだけでも、松本隆氏についてそれなりの知識は得られるのであるが、それでは本書を「使いこなした」とは言えない。本書で検索しても、書誌が掲載されていない本の情報は抜け落ちているからである。テーマ別にどんな文献が出ているかを知りたいだけなら、『日本件名図書目録』などテーマ別文献索引、あるいは図書館OPACのキーワード検索を使えば足りる。

本書の真の出番は、その先にある。本書は“書誌の書誌”であるので、

今出てきた6冊の本には、必ず書誌、つまり文献一覧が掲載されている。1冊手に取ってみると、そこにはその本を書くために著者が使った本が、参考文献一覧という形でズラリと並んでいる。6冊それぞれの書誌に掲載されている文献を総合し、自分が読まねばならない本（単行書だけでなく雑誌記事や論文なども含む）をリストアップする。これが、文献調査の始まりである。

リストアップした文献がまだ少ないと感じられた場合は、本書の過年度版を閲覧するとよい。『書誌年鑑』は1982年以降毎年刊行されており、さらに数年に一度の割で『人物書誌索引』『主題書誌索引』という2冊の蓄積版も発行されている。そちらの書誌も参照すれば、さらに多くの文献が閲覧できるはずである。今年版『書誌年鑑2023』にキーワード「松本隆」はないが、「流行歌」は2件ある。昨年版より前では、『2021』に「流行歌」のみ5件、『2020』『2019』に「流行歌」各3件、『2018』に「松本隆」1件と「流行歌」3件、『2017』に「流行歌」4件、『2016』に「流行歌」1件。これで、2015年以降に刊行された書誌は全てチェックできたことになる。なお、2021年以前は蓄積版でも検索できる。『人物書誌索引2015-2021』に「松本隆」が2件、『主題書誌索引2015-2021』に「流行歌」が25件発見される。

さて、あるテーマに関して複数の書誌を検討していくと、どの書誌にも共通して掲載されている本があるのに気付く。これは、そのテーマについて調べる際に読んでおかなければ始まらない、どの著者も参照「せざるを得なかった」基本的な重要文献である。目標とするテーマについて、まずそうした本を探し出し、内容を徹底的に把握することにより、書こうとする論文に盤石な基礎が形成されることになる。

それ以外の文献は、バラエティに富んだ様々なものが掲載されている。中には、直接関係あると思えないような文献もあるが、こういった文献はすべて、論文に枝葉を茂らせるためのものである。たとえば、『書誌年鑑2018』に『阿久悠と松本隆』という本が出ている。この本の書誌には、松本氏の同業者、阿久悠氏に関する文献も多数収載されていると予想される。『勝手にしやがれ』『UFO』などで有名な阿久氏について知る

ことは、松本氏を把握するうえで有力な材料になるはずである。たとえばまた、『木綿のハンカチーフ』の時代背景を語るには、同曲ディレクターの出身地である筑豊について知ることが必要だ。となれば、福岡県の地理や歴史に関する本がもしあれば、そこに関していえば松本氏に関連した本ということになる。

あとは、書誌で見つけた文献を徹底的に調べ上げれば、力作の出現は近い。ここまで来れば、あなたはもはや松本隆氏の“第一人者”といえよう。

3. デセール

残念ながら、本書の存在はあまり知られていないようだ。この原稿を書く際、いろいろな大学の「論文の書き方」のようなwebページを複数見てみたが、本書に触れているものを発見することはできなかった。しかし、逆に言うと、存在の知られていない本書を活用することで、あなたはライバルに一歩も二歩も差をつけることができるのである。

本書のような「書誌の書誌」は、欧米など諸外国では、国立図書館や最有力図書館学会の編集物であることが多いようだ。一方日本では、一介の個人編集者が細々と作り、それを志のある出版社が採算を度外視して刊行しているのが現状である。しかし今後、日本の学術や文化、とりわけ人文・社会分野においては、「書誌の書誌」を一瞥すれば、到達水準の高さが一目で読み取れるようになるであろう。過去の編者は、そう信じて本書を毎年編集してきたし、私もそのつもりでいる。末永くご愛顧を賜りたい。（有木太一）

【あ】

『アーサー王伝説』 ⇨バラッド	『フェロー 諸島のアーサー王物語—バラッド 『ヘリントの息子ウイヴィント』をめぐって』(林邦彦)	文化書房博文社 2022.1	参考文献 p201-209	あ
アートドキュメン テーション	『アート・ドキュメンテーション研究 30』 〈JADS文献情報委員会〉	アート・ドキュメン テーション学会 2022.5	文献目録 p89-102	
アートマネジメ ント	『アートプレイスとパブリック・リレーショ ンズ—芸術支援から何を得るのか』(川北眞 紀子ほか)	有斐閣 2022.11	参考文献 pr	
アーミッシュ派 ⇨キルティング	『アーミッシュキルトを訪ねて—照らし出 される日々の居場所へ』(鈴木七美)	大阪大出版会 2022.4	引用文献 p283-275	
アーレント, H.	『〈政治〉のこれからとアーレント—分断を 克服する「話し合い」の可能性』(佐藤和夫)	花伝社 2022.9	引用参考文献 p1-11b	
アーレント, H.	『アーレントの哲学—複数的な人間的生』 (橋爪大輝)	みすず書房 2022.9	参考文献 p1-8b	
アーレント, H.	『ハンナ・アレント—全体主義という悪夢』 (牧野雅彦)	講談社 2022.9	読書案内 p115-117	
愛	『物語万華鏡—「木石雲」他』(佐藤義隆)	あさ出版パート ナース 2022.5	参考文献 p380-383	
愛	『「愛」の思想史』(山本芳久)	NHK出版 2022.10	参考文献一覧 p236-237	
愛	『アガペーとフィリア—愛についての聖書 学的考察』(原口尚彰)	リトン 2022.10	文献 p149-158	
愛国心	『愛国の起源—パトリオティズムはなぜ保 守思想となったのか』(将基面貫巳)	筑摩書房 2022.6	参考文献 p1-9b	
IgA腎症	『IgA腎症の病態と扁桃パルス療法 2版』 (堀田修)	メディカル・サイ エンス・インター ナショナル 2022.1	参考文献 p143-158	
ICT ⇨発展途上国開発	『デジタル技術と国際開発』(R. ヒークス)	日本評論社 2022.3	参考文献 p409-444	
会津八一	『会津八一名品50選—新潟市会津八一記念 館所蔵』(会津八一記念館)	新潟市会津八一記 念館 2022.3	略年譜 p86-87	
アイズナー, E. W.	『「教育評価」の基礎的研究—「シカゴ学派」 に学ぶ』(田中耕治)	仏教大 2022.3	著作 p192-193	
アイスランド ⇨漁撈	『アイスランド—海の女の人類学』(M. ウ イルソン)	青土社 2022.10	参考文献 p1-6b	

会田千衣子	『会田千衣子詩集』(会田千衣子)	土曜美術社出版販売 2022.12	年譜 p186-189
愛知県 ⇔古墳	『濃尾地方の古墳時代』(藤井康隆)	東京堂出版 2022.2	文献 p346-364
愛知県 ⇔地域社会	『かわりの循環—コミュニティ実践の社会学』(松宮朝)	晃洋書房 2022.3	参考文献 p179-188
愛知県 ⇔方言	『記憶のなかの「碧南方言(ことば)」一語彙・語法・音韻の特徴』(石川文也)	春風社 2022.4	参考文献表 p219-222
愛知県 ⇔鉄道	『愛知の駅ものがたり』(藤井建)	風媒社 2022.6	参考文献 p152-153
愛着 ⇔児童養護施設	『児童養護施設における養育に関する研究—アタッチメント理論を基盤として』(高安和世)	時潮社 2022.7	引用文献 p177-191
愛着障害	『愛着障害は何歳からでも必ず修復できる』(米澤好史)	合同出版 2022.9	引用文献 p202-205
アイデンティティ	『異文化接触における文化的アイデンティティのゆらぎ—外国語指導助手(ALT)のJETプログラムでの学校体験および帰国後のキャリア 増補』(浅井亜紀子)	明石書店 2022.1	引用文献 p256-264
アイデンティティ	『アイデンティティ—時間と関係を生きる』(白井利明ほか)	新曜社 2022.4	文献 p8-23b
アイヌ ⇔工芸美術	『もっと知りたいアイヌの美術』(山崎幸治)	東京美術 2022.2	参考文献ほか p79-78
アイヌ	『つないでほくアイヌ/和人』(北原モコトウナシ)	北海道大 2022.3	ブックガイド p189-190
アイヌ ⇔通過儀礼	『アイヌ民俗技術調査 13 生活習慣(成人儀礼等)に関する民俗技術 2』	北海道教委 2022.3	参考引用文献 p319-320
アイヌ ⇔ビーズ細工	『アイヌのビーズ—美と祈りの二万年』(池谷和信)	平凡社 2022.3	参考文献 pr
アイヌ ⇔北海道史	『十勝のアイヌ民族—その歴史的な経緯を「市町村史」などにより探る』(加藤公夫)	北海道出版企画センター 2022.3	引用参考文献 p471-476
アイヌ	『辺境から眺める—アイヌが経験する近代新装版』(T. モーリス=鈴木) (大川正彦)	みすず書房 2022.5	単行本ほか p260-261
アイヌ	『「新しいアイヌ学」のすすめ—知里幸恵の夢をもとめて』(小野有五)	藤原書店 2022.8	引用文献 p364-380
アイヌ ⇔松前藩	『クナシリ・メナシの戦い—事件の復元と歴史的位相』(菊池勇夫)	藤田印刷エクセレントブックス 2022.8	参考文献 p262-263
アイヌ	『アトウー海と奏でるアイヌ文化』(石川県立歴史博物館ほか)	アイヌ民族文化財団 2022.9	読書案内 p196-197
アイヌ語	『アイヌ韻文の朗唱法—カムイユカラの抑揚生成』(丹菊逸治)	北海道大 2022.3	引用文献 p308-310
アイヌ語 ⇔地名	『アイヌ語で考える縄文地名』(網野皓之)	花伝社 2022.9	参考文献 p180-182

アイヌ語 ⇔ロシア語	『M. M. ドプロトヴォールスキのアイヌ語・ロシア語辞典』(M. M. ドプロトヴォールスキ)	共同文化社 2022.11	諸資料 p14-28f
「アイハヌム加藤九 祐一人雑誌」 2001.11.20- 2012.12.20	『アイハヌム—加藤九祐一人雑誌』(『アイハヌム』復刊実行委員会)	平凡社 2022.7	総目次 p218-225
始良市	『始良市誌 2』(始良市誌編集委員会)	始良市 2022.3	参考文献 pr
アイルランド	『アイルランド現代史—独立と紛争、そしてリベラルな富裕国へ』(北野充)	中央公論新社 2022.9	参考文献 p277-271
アイルランド文学	『イエイツ研究 52』	日本イエイツ協会 2022.3	書誌 p48-53
アウシュビッツ強制収容所	『アウシュヴィッツのお針子』(L. アドリントン)	河出書房新社 2022.5	参考文献 p360-355
アウシュビッツ強制収容所	『アウシュヴィッツの残りのもの—アルシーヴと証人』(G. アガンベン)	月曜社 2022.12	参考文献 p1-5b
青池保子	『青池保子—総特集—船乗り! 泥棒! 王様! スパイ!—キャラが物語をつくる』(青池保子) (図書の家)	河出書房新社 2022.10	作品リスト p198-205
亜欧堂田善	『亜欧堂田善—江戸の洋風画家・創造の軌跡—没後200年』(坂本篤史ほか) (坂本篤史)	福島県立美術館 2022.10	参考文献 p269, 284-287
青木勝利	『「ジョー」のモデルと呼ばれた男—天才ボクサー・青木勝利の生涯』(葛城明彦)	彩図社 2022.3	参考文献 p238-239
青木繁 ⇔坂本繁二郎	『ふたつの旅—青木繁×坂本繁二郎—生誕140年』(伊藤絵里子ほか) (森山秀子)	石橋財団アーティゾン美術館ほか 2022.7	文献抄 p230-238
青森県 ⇔狩猟	『弘前藩いきものがたり 2 古文書で見る郷土の自然』(竹内健悟)	北方新社 2022.1	文献 p125-128
青森県 ⇔迷信	『あおもり俗信辞典』(佐々木達司)	青森文芸出版 2022.7	参考文献—覧ほか p216-218, 248
青森県史 ⇔林業政策	『近世・近代の森林と地域社会』(萱場真仁)	吉川弘文館 2022.1	参考文献 p280-288
青山宏夫	『国立歴史民俗博物館研究報告 234』(大久保純一)	国立歴史民俗博物館 2022.3	業績目録 p155-156
青山宏	『風祭 19』(保莉佳昭)	宋词研究会 2022.12	著作目録 p1-4
赤磐市 ⇔荘園	『備前国鳥取荘—成立から崩壊まで』(岸田崇)	吉備人出版 2022.2	参考資料 p113-114
赤磐市 ⇔山陽道	『律令の大路山陽道—赤磐市域を中心として』(岸田崇)	吉備人出版 2022.11	参考文献 p65-66

◎配列は解説者名の五十音順とし、同一解説者内ではキーワードの五十音順とした。

◎解説者 () 内は新旧関係機関など

有木太一 (本書編者)

飯澤文夫 (元明治大学図書館)

河村圭子 (元日本大学図書館)

鈴木一正 (元国文学研究資料館)

増井ゆう子 (国文学研究資料館)

水村里都代 (東京農業大学第一高等学校・中等部)

沖縄県史 『復帰50年沖縄を読む—沖縄世はどこへ』（東アジア共同体研究所琉球・沖縄センター） ボーダーインク 2022.6 157p A5

2022年は、太平洋戦争終結後アメリカに占領されていた沖縄県が日本に復帰して50年の節目となる年であった。沖縄の歴史をひもとく際、独自の時代区分として「世」（ゆー）という言葉が使われる。中国に朝貢した琉球王国時代を「唐ぬ世」、日本に所属してからを「大和世」、米軍施政権下に置かれた1945～1972年を「アメリカ世」という。書名にある「沖縄世」とは何か。「どこへ」と書かれているとおり、それこそが沖縄県民の根本的アイデンティティの問題であり、県民自身が自立して意思決定できるようにすべきという問題意識を反映している。東アジア共同体研究所は、政治家を引退した鳩山友紀夫（由紀夫）元首相により2013年に設立された。

本文は縦書きで、1ページに42字×19行。目次の後に、同研究所の理事でジャーナリストの高野孟氏による「復帰50年、これでよかったのか」と題する28頁にわたる巻頭言が置かれ、本の性格を位置づけている。メインの書誌部分である「復帰50年 沖縄を読む」の後に、同研究所の琉球・沖縄センター顧問、緒方修氏による「長いあとがき」（9頁）。末尾には、五十音順で書名のみ羅列した「書籍索引」と、「復帰50年年表（1972-2022）」が付される。2つのコンテンツは横組みで最終頁（p157）から始まっているが、ノンブルは縦書き部分から通しになっている。

「復帰50年 沖縄を読む」は、沖縄に関する書籍を、復帰50年にちなみ県内外の50人が推薦したもので、各自一人2頁を寄稿している。タイトルと執筆者名、肩書を1行で収め、1冊を選んで記述した本文を掲載、ページ末尾に書誌事項（書名、編著者名、出版者、出版年）、という形が大半である。複数の本を取り上げた寄稿者が複数いる一方、『ほくが遺骨を掘る人「ガマフヤー」になったわけ。』『琉球王国衰亡史』の2冊は重複している。沖縄ゼネストやベトナム戦争時の枯れ葉剤についての本、大江健三郎やフランツ・ファノンといった著者による本が含まれる。

執筆者50人の肩書を見ると、ジャーナリスト、議員（国会・地方）、大学教授など研究者、作家といった職業もあるが、平和運動やもろもろのNPOで活動している人も多い。脳科学者の茂木健一郎氏や、研究所理事長の鳩山元首相も寄稿している。一方で《沖縄の現在が浮かび上がる人選にしたかったが、残念ながら財界人がいない。沖縄では最大のシンクタンクであるはずの県や市町村の職員（行政マン）がいない。》と「長いあとがき」に記述があり（p142）、また表紙の写真に「米軍辺野古新基地の埋立海域」沖縄防衛局によるサンゴの移植作業」とあって、人選や内容には一定の方向性が感じられる。巻頭言やあとがきも総合すると、玉城デニー沖縄県知事を支持する「オール沖縄」につながる人たちのようだ。

編者略歴

有木 太一（ありき・ふとし）

1968年生、早稲田大学第二文学部卒。深井人詩氏に師事して、在野の書誌研究者となる。2016年版から中西裕氏のもと『書誌年鑑』の編集に加わり、中西氏勇退後の2018年版から編集作業を引き継いだ。編著書は『書誌年鑑』のほか、『人物書誌索引 2015-2021』（中西氏と共編）、『主題書誌索引 2015-2021』（同）。

「最近の書誌図書館関係文献」（日外アソシエーツHP）
毎月連載。



書誌年鑑 2023

2023年12月25日 第1刷発行

編 集／有木太一

発 行 者／山下浩

発 行 行／日外アソシエーツ株式会社

〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16 鈴中ビル大森アネックス

電話 (03)3763-5241 (代表) FAX(03)3764-0845

URL <https://www.nichigai.co.jp/>

電算漢字処理／日外アソシエーツ株式会社

印刷・製本／株式会社平河工業社

©ARIKI Futoshi 2023

不許複製・禁無断転載

<落丁・乱丁本はお取り替えます>

〈中性紙北橋淡クリームキンマリ使用〉

ISBN978-4-8169-2988-5

Printed in Japan, 2023